



Salone del Mobile.Milano 2019 概要

サローネ国際家具見本市

サローネ国際インテリア小物見本市

S.Project

Workpalce3.0

【家具デザインの新たな方向性】

2018年に、私たちは家具デザインの世界における共通の美意識がなくなりつつあるのではないかと仮定しました。それから1年経った今、果たしてその仮説は正しかったのでしょうか？ 具体例を挙げながら状況を分析し、検証してみました。

【ユニバーサルな家具の定義】

まず注目したいのは、差し迫った市場のニーズから“ユニバーサルな家具”を定義しようとする試みです。ユニバーサルな家具とは、ニュートラルなものではなく、多彩で国を越えて人々に受け入れられるものを意味します。行き着いたのは**詩的でシンプル**な表現。それは、1990年代後半のミニマリズムとは異なります。飾り気のない質素なデザインや、学校の家具を思い起こさせるアプローチ。TAF スタジオがストックホルムの国立博物館のためにデザインしたArtekの「**Atelier chair**」、**ダヴィッド・ロペス・キンコセス**によるミニマルなラインのコンソール、Lemaの「**Ella**」がその典型です。Poliformから発表された**ジャン・マリー・マソー**のアームチェア「**Kay Lounge**」や、Aliasの**ミケーレ・デ・ルッキ**によるソファ「**Trigono**」も同じ文脈にあります。よりデンマーク家具の伝統を踏襲しているようです。また、**ロドルフォ・ドルドーニ**がデザインしたZanottaの肘掛け椅子「**Tusa**」には、50年代アメリカのデザインを感じられます。



Salone del Mobile. Milano

そして伝統的な家具の再解釈も、詩的なシンプリシティの一つの潮流です。例えば**Gebrüder Thonet Vienna**の新作、**マイケル・アナスタシアデス**のタイムレスな曲げ木のアームチェア「**200**」が挙げられます。

【過去のデザインの復刻や再解釈】

忘れ去られていた作品をアーカイヴから復刻することも、引き続き揺るぎないトレンドです。新しいものへの不安に対して、デジャヴで安心感を得ようとする感覚は、特にバイヤーの間で顕著に見られます。今年**バウハウス**創設から100周年。ムーブメントの重要な役割を担っていた**Knoll International**の名作たちにも注目です。「**Balcerona Chair**」などをデザインした**ミース・ファン・デル・ローエ**は、1933年に学校がナチスにより閉鎖された時の**バウハウス**最後のディレクターでした。**ニコラ・ガリツィア**がデザインした**Porro**のラウンジチェア「**Lull**」には、**バウハウス**へのオマージュが込められています。

また、デンマークデザインの復刻からも目が離せません。**Carl Hansen & Son**は、1954年に**ハンス・ウェグナー**がデザインしたチェア「**CH30**」と、**ボーエ・モーエンセン**が1949年の作品「**Contour**」チェアを復刻。**Fredericia**は、アーカイヴから2016年に100歳で亡くなった**ジャン・リソム**のデザインに光を当てて「**Magazin**」テーブルなどを発表します。

一方で**Fritz Hansen**は、60年代からそのままになっていたアメリカのデザイナー、**ポール・マッコブ**（1917-1969）についてのリサーチを続け「**Planner**」シェルフを発表。**ハイメ・アヨン**が**ハンス・ウェグナー**や**フィン・ユール**など、50年代のデンマークデザインの形をふくらませた、漫画のキャラクターのようなアームチェアも登場しました。



Salone del Mobile.Milano

そのほか、イタリアデザインへ回帰する傾向も見られます。**Poltrona Frau**は**ジャンフランコ・フラッティアーニ**のデザインを模索し続け、中心部が回転する本棚「**Turner**」（以前のモデル「823」）を提案。

近現代のものの復刻もあります。90年代後半に蒲原 潤によって設計された「**JK easy**」チェアは、**Ritzwell**が再生産を始めました。金属のフレーム部は経年変化によって酸化し、美しい緑青が見られます。1993年に**ジャン-ミシェル・ヴィルモット**がルーブル美術館のために制作した「**Todo Modo**」ソファは、現在は**Tecno**から復刻しました。

【不完全さに美しさを見出す】

それでは、2019年に見られる新しさとはどのようなものでしょうか？ ファッションデザインの世界の影響が見られたり、大量生産しなくてもリアルタイムで“複製”ができるようになってきています。そうした流れの中で目立っているのが、**ネオプリミティブ（新原始主義）**です。特定の産地と質感の石（濃い色、縞模様、砕いたもの）、無垢材、手織りのファブリック、顔料で着色しワックスで仕上げたセメントなどを使用する傾向があります。言うなれば、いろいろなものを見てきて、すべてを持っている人々のための贅沢と、原始の洞窟の神話がミックスされた世界観です。**Analogia Project**は、新生ブランド**JCP**のために、古代氷河の浸食のようにプレキシガラスのブロックをくり抜いて「**Glacoja**」センターテーブルを制作。そして**サム・バロン**はオニキスキューブに酸化銅の小さなカップを添えたフラワーベース／キャンドルホルダー「**Aboram**」をデザインしています。一方、**パオラ・ナヴォーネ**は**Gervasoni**と共に、通常彫刻や小さな部品に使われる技術を使い、アルミ鋳造で作られた背もたれにバックミシンの縫い目が特徴的なチェア「**Next**」を提案しています。

それらを総合的に見ると、歴史上の様々な時代にあったように、不完全さに美しさや価値を見出すということなのかもしれません。ここでも過去の巨匠たちにの力を借りることは役立つでしょう。その例が、1899年に**アントニ・ガウディ**によって



設計され、**BD Art Edition**のリエディションとして発表された壁掛け型の「**Calvet Hanger**」です。

そして**A Lot of Brasil**の「**Amazonia**」ベンチコレクションは、先日他界した**アレサンドロ・メンディーニ**にオマージュを捧げています。メンディーニが瞬時に聖人化したことは、**Sawaya&Moroni**の**ウィリアム・サワヤ**が光学インレイで装飾した食器棚「**Alessandro I**」「**Alessandro II**」「**Alessandro III**」シリーズにも見取れます。

技術的な分野の新製品も、おとぎ話のような空間作りで楽しませてくれます。**A+B Dominoni Quaquero**が、凹凸のある音響材料を用いて**Caimi Brevetti**のためにデザインした「**Pinna**」は、壁または天井に取り付けることができます。また**Andrea Ruggiero**は、空間の間仕切りとして使用できる「**Soundsticks**」を発表しました。

【エコロジーのレッスン】

リサイクルへの関心が高まっているおかげで、私たちの美学が変化してきています。環境への配慮とともに、既存の素材に置き換わりつつあるリサイクル素材。それらのもつラフさや未完成さ、ときにカジュアルさも魅力となり得ます。この意味で象徴的なのは、**BD Barcelona**の**Remix Vol3**のための**Jorge Penadé**のプロジェクトです。彼は色のついたアルミ鋳造と、終売してしまった製品用の余ったパーツを組み合わせ、花瓶のコレクション「**Piscis**」を作り上げました。デザインシーンの一部は、**XXII Triennale di Milano**で開催されている展覧会、人間と自然の調和のとれないほどの喪失をテーマにした「**Broken Nature**」の影響を受けています。



【完成度と不完全性】

ここまでを振り返ると、2019年のデザインプロダクツからは2つの対照的なトレンドが見えてきます。一つは、心地よさとラグジュアリーの追求。しばしば50年代の影響が見られ、洗練されたデザインで、伝統的なイタリアのインテリアデコレーションのようにトータルコーディネートで世界観を作り上げます。xLuxパビリオンに出展している**Giorgio Collection**、**Annibale Colombo**、**Baccarat La Maison**などは、すべてのディテールやファブリックに統一感があり、洗練された家のような空間が楽しめます。もう一つは、不完全性と職人の手仕事を重視した新しい価値感です。そこでは“クラフツマンシップ”という言葉が多用されています。

これらの2つのトレンドに共通している点は、ゴールドカラーです。ピカピカしたゴールドから、時間を経て鈍い輝きに変わった真鍮、手塗りの金箔まで、すべてを含みます。屋外でも**Gandia Blasco**の**Daniel Germani**による「**Solanas**」コレクションなど、ゴールドが基準色になります。

【アウトドアファニチャーが新しいステータスシンボルに】

アウトドア家具の分野が急成長しています。**Flexform**は、**アントニオ・チッテリオ**のクラシックなデザインで、アウトドアコレクションをローンチ。**Giorgetti**は**パロンバ・セラフィニ**を起用し、**アイリーン・グレイ**を引用して「**Break**」コレクションを発表します。

インドアとアウトドアの境界も混じり合っています。**Glas Italia**では、ニューヨークとトロントに拠点を置くデュオ、**ヤブ プッシュャーバーグ**が、テラリウム/プランターとして使えるクリスタルの“洗面器”を展示しています。植物モチーフの壁紙で自然の風景を表現する手法も見られます。**マルセル・ワンダース**が**Londonart**のために手がけたのは、緑豊かな「**Wonderlust**」。 **Wall&Decò**からは大きな動物の壁紙が登場。壁紙はその年の様相を映していると言えます。**Jannelli & Volpi**は「**A Tribute to Kandinsky**」と題したエキシビションで、環境芸術を提唱します。ま



た、**Missoni Home**の**ロジータ・ミッソーニ**は、新しい2019年コレクションの主要なテーマとして自然の色合いを選んでいます。「**Winter Garden**」は素晴らしいです。

その一方で、実際のアウトドアデザインと言えば、**Ethimo**の**パトリック・ノルゲ**がデザインした「**Swing**」コレクションと、**B&B**の**アントニオ・チッテリオ**による「**Ribes**」には、布団のシンプルさと、ストライプのマットレスの新鮮さがあります。以前のアジアブームに取って代わって、現在はアフリカと南米ブームが来ています。

Diablaは、アウトドアファニチャーやアクセサリーの全カタログを初めて発表します。特に印象的なのは、イギリスのデザイナーであり版画家の**Jonathan Lawes**による、幾何学模様を天板に使った「**Mona**」です。**Colé**からは、**Julia Dosza**がマレビックに触発された「**Kazimir**」スクリーンが、洗練されたアウトドアアートとして発表されています。**Tristan Lohner**がフランスの**Fermob**のためにデザインしたテーブルコレクション「**Bebog**」は、脚部と天板のサスペンションがユニークで、ミニマリズムと80年代の要素を含んでいます。一方、**da a**のために**Angeletti Ruzza**がデザインした「**Trame**」プーフは、手織りのテキスタイルを彷彿とさせる抽象模様が見事です。

【分野を超えてクロスオーバーする空間】

コントラクト家具の分野では、非常にハイエンドな市場が拡大しているという経済的側面、そして居心地のいい繭のような“ネストルーム”が求められているという精神的側面から、異なる環境を混成したハイブリッドな空間が生まれています。その結果として、個々のピースをデザインするだけでなく、空間全体をデザインすることが必要とされています。

装飾的な考え方は、フローリングや壁の仕上げ、塗料にも反映されています。そしてこれらはすべて、雰囲気のある照明によって演出されるのです。空間に選ばれ



Salone del Mobile.Milano

る色合いは、家具などの生地とリンクします。モノは空間に個性を与えるために使われるのではなく、テイストと文化を伝える存在になりました。ベルギー・オステンドの**アトリエ・ヴィエルカント**で粘土を扱う熟練の職人のように、クラフツマンシップが大きな役割を担うでしょう。

デザインの流動性によって、リビングとキッチン、寝室とバスルーム（**Effegibi**によるサウナ「**Yoku**」を参照）などが融合し、複数の用途のある空間が生まれたり、共通の仕上げができるようになっていきます。また、家、ホテル、オフィスなどの屋外スペースも、内部スペースと同様に重要視されているため、アウトドアファニチャーへの投資も増えています。

私たちはまた、異なる次元にまたがるデザインを見ています。まず、オフィスと家庭の融合です。例えば **Raffaella Mangiarotti**が**IOC**に提案した「**Ghisolfa**」は、防音効果があり、パブリックやコワーキングスペース、さらに最新のコハウジング（共同生活）のシーンでも間違いなく役立つはずです。**Troels Grum-Schwensen**による**Lammhults**の「**Ponto**」のテーブルも同様です。**Rimadesio**が発表した**Giuseppe Bavuso**の「**Self**」ディスプレイユニットは、家庭とハイエンドなブティックが融合したような環境を目指しているようです。

Lualdiの**ピエロ・リッソーニ**による「**Lybre**」（360°回転して本棚になり、「秘密の部屋」への入り口を覆い隠す壁）は、家具の領域を超え、“**家具建築**”とも言えるものになっています。同様に、**ジャン・ヌーヴェル**が**MDF**から発表した「**Super Position**」を説明するには、“本棚”という言葉は不適切であるように思われます。これは、“スペース内のボリューム”に関連しています。

家具と彫刻、あるいはアートとデザインの境界を代表する実例としては、**Eoos**による**Walter Knoll**のためのワークテーブル「**Tama**」があります。流れるような木のラインと、ブロンズのベースは、**イサム・ノグチ**の作品を思わせます。**Lago**のカプセルコレクション「**XGlass Home**」は、ファッション性の高い生地を使い、オートクチュールの世界を見せてくれます。



最後のハイブリッドな融合は、デザインと私生活にまたがるものです。デンマーク人デザイナー**Johannes Torpe**が手がけた**Moroso**の「**Heartbreaker**」ソファは、アームレストの部分が壊れたハートの形をしていて、結婚前夜に彼の元を去った女性に対する悲しみを公然と語っています！

【素材の表面に宿る美学】

2019年の本当の革命は、オブジェクトの体積よりも表面に関係します。“表面の美学”が発達してきています。白いカラー大理石、オーク材などの伝統的な素材、ニュートラルなラッカーを使った表面は、仕上げの贅沢さで際立っています。これは数年前に始まった傾向ですが、このところ爆発的に流行しています。**Stormo**の**De Castelli**によるサイドテーブル「**Alchemy**」は、卑金属を変換する古代の錬金術のテクニックを参照しています。

このような、まるで現在をスキップして“30世紀にワープしたルネサンス期の工房”という姿勢は、非常に前向きな効果をもたらしています。古代の採石場や木材の種類類の保存、籐のような伝統的な素材の再発見、そして職人や生産的な技術の温存（スペインの老舗**Expormim**を参照）、そして表面仕上げの革新（セラミックカバーやラミネート、および**Cleaf**のピラミッドパネルを参照）などです。多彩な技術革新によってテキスタイルの世界にも変化が見られます。**Dedar**と**Rubelli**はどちらも、これまで考えられなかったような高性能の生地を作る一方、過去のアーカイヴの研究を進めています。**ベルベット**は秋色のカラーパレットでしばらく人気が続きそうです。赤系ならパウダーピンクからテラコッタとオックスブラッド、黄色系ならマルサラ、蜂蜜、茶系、緑系ではカーキ、スラッジとセージ。

天然素材以外にも、**アントニオ・ルピ**の「**Cristal Mood**」「**Marmor Natum**」と呼ばれる着色されたレジンや、**グエナエル・ニコラ**は**Budri**のために大理石を一度砕いて再構築するなど、独自のソリューションを生み出す方向性もあります。**Kartell**



は フィリップ・スタルクの「**Smart Wood**」コレクションにおいて、昔ながらの木材を高性能の工業用素材に変えることに成功しています。

【変化するデザイナーの役割】

研究室や工場で素材と向き合う技術的なプロセスが終わると、その結果を正確にプレゼンテーションすることはデザイナーというよりもスタイリストだと言えます。現代のデザイナーは、戦後から続いた発明者としてのデザイナーから、アートディレクターへと変貌しなければならないのです。この流れにおいて、デザインスターの立ち位置が見直されています。ブランドやメーカーもデザイナーの名声に頼るのではなく、自分たちの高い技術力があってこそ、いいもの作りができるのです。こうした取り組みができている企業はまだまだ少ないものの、そこでは常に正しいブランドとデザイナーの組み合わせが生まれています。その好例が、**ジャスパー・モリソン**と**深澤直人**という2人の巨匠の言葉を静かに伝える日本のマルニ木工です。同様のアノニマスな作風のブランドとして、無垢の木のテーブルとベンチを制作したデンマークの**Muuto**と、**Kaksikko**による「**Akademia**」チェアを発表したフィンランドの**Nikari**があります。アメリカの**Emeco**は、環境への配慮と静かなデザインを組み合わせ、常に最先端を走ってきました。**バーバー・オズガビー**による新作「**On&On**」コレクションは、70%が再生ペットボトルで作られています。

Salone del Mobile.Milano Japan Press PR 山本幸 yuki@milanosalone.cm

Salone del Mobile.Milano Press Office :

Marva Griffin Wilshire – Patrizia Malfatti press@salonemilano.it